

「都市」グロスターとその問題

——チャールズ・オルソンとハーバート・A・ケニーの対談より——

平 野 順 雄*

Gloucester, the “Polis,” and Its Problems

—An Essay on Charles Olson’s Conversation with Herbert A. Kenny in *Muthologos*—

Yorio HIRANO

キーワード

チャールズ・オルソン	Charles Olson
『ミュソロゴス』	<i>Muthologos</i>
「都市」グロスター	Gloucester, the “Polis”
ハーバート・A・ケニー	Herbert A. Kenny

はじめに

『ミュソロゴス』(*Muthologos*)は、チャールズ・オルソンが1963年から1969年の間に行なった計13の講演、座談、インタビューを集めたものである。標記の対談は、その最後に当たる。本論の副題に対談のタイトルを圧縮して示したが、対談の原タイトルは、“‘I Know Men for Whom Everything Matters’: Charles Olson in Conversation with Hebert A. Kenny”である(*Muthologos* I, 154)。

『ボストン・グローブ』(*the Boston Globe*)の書評欄編集者、ハーバート・A・ケニー(Herbert A. Kenny)は、マサチューセッツ州マンチェスターにある自宅で、オルソンと語るうちに、『マクシマス詩篇』の舞台であるアメリカの始源の地、グロスターが瀕している危機に気付いて行く。オルソンとケニーの対談を通して、グロスターの孕む問題点を考察するのが、本稿の目的である。

尚、本稿で示す対談の訳が逐語訳でないことを、はじめにお断りしておく。

I. グロスターの家庭問題

ケニーは、開口一番、グロスターの家庭に問題があるのではないかとオルソンに問いか

* 人間関係学部 人間関係学科

ける。

ケニー モーリー裁判官が云ったんだ。他のどの町よりもグロスターには家庭問題が多いとね。

オルソン その通り。

ケニー どうしてかを尋ねると、船が問題なのだそう。船が。一人の男が船に乗って出て行く。妻は寂しくなって、酒場に行く。男はポケットに数ドル持って家に戻る。しかし、帰宅する前に酒場に寄る。男は人妻に出会う。男の船とは違う船を待っている人妻だ……だが、何と言うか——グロスターには、素晴らしくヤフー的な要素 (yahoo element) があるよ。

オルソン ふーん。そうかもしれない。その通りだ。

ケニー そして、このヤフー的要素は、あらゆるレベルに存在している (154)。

ここで、ケニーが話題にしている家庭問題は、漁師を夫に持つ妻が、不安のあまり夫の帰りを待ちかねて、酒場に行くことが発端になっている。こういう人妻は、漁を終えて酒場へ来る漁師と、知り合いになりやすい。妻は寂しさから、この男と性行為に及ぶ可能性がある。

こういう状態をケニーは「ヤフー的な要素」と呼んでいる。「ヤフー」は、スウィフト作『ガリヴァー旅行記』に登場する汚らしい人間を指す言葉である。高貴な馬 (フウイヌム) が支配する国において、人間はすべて下等で卑しいヤフーに他ならない。

古代ギリシャの都市国家のように、自律した「都市」(“polis”)として指定されたグロスターが (Maximus 14, 24, 26, 30), 夫の無事を祈る妻の不安と、そこに付け入る夫の同業者の情欲によって、内部から崩れる様子が描かれている。漁師のモラルを崩すものこそ、「ヤフー的な要素」なのである。ケニーは、この「ヤフー的要素が、あらゆるレベルに存在している」と言うが、その内実は何だろうか。

II. 家庭問題の深層

始源の「都市」グロスターの質朴な営みを破壊する「ヤフー的な要素」は、妻や夫の不倫によって家庭を壊すばかりではない。その要素は、家庭破壊に留まらず、「都市」グロスターの存立の基盤をも脅かすのである。以下、ケニーとオルソンの対談を通じて、家庭問題の深層に存在する問題の束を見ておこう。

1. 不動産業者の土地開発

ケニー 私が指摘したいのは、次の点だ。アメリカが多くの不動産業者その他によって滅ぼされているとするなら、その状況は小宇宙としてのこの地に達しているということだ。イプスウィッチは、今やブルドーザーに蹂躪されている。業者は1800万の住民を見込み、33平方マイルを当てる計画である。そこが一番大きな地域になるだろう。グロスターは破壊され、墮落している。あたりを見るたびに、新たな建物が取り壊されている。唯一ところが暖まるのはフィッツ・ヒュー・

レーンの美術館を、私の友人ハイド・コックス (Hyde Cox) が増築し、レーンの絵画を展示できるようにしたことだ (155)。

不動産業者の土地開発によってアメリカが減びるのではないかと、ケニーは不安を感じている。それは上に見るとおりである。しかし、イプスウィッチ (Ipswich) の土地開発を語るあたりから、語る内容と文構造の乱れが目につき始める。

3行目のイプスウィッチは、グロスターの北西にあるマサチューセッツ州の町である。この土地がブルドーザーに蹂躪されているかどうかは、確認しがたいが、『マクシマス詩篇』「手紙、1959年、5月2日」には、グロスターの宅地造成にブルドーザーが活躍する記述がある (Maximus 153-154)。この宅地造成は「リヴァーデイル／パークの焼き直し」(153) とされているので、ケニーの語るイプスウィッチの土地開発は、リヴァーデイル・パーク (Riverdale Park) の宅地造成のことを言っているのかもしれない。

グロスターを南北に縦断するアニスクウォム川 (the Annisquam River) の南端はグロスター港 (Gloucester Harbor) に注ぎ、北端はイプスウィッチ湾 (Ipswich Bay) に注ぐ。リヴァーデイル・パークは、そのほぼ中央に位置するのだが、ケニーはそこを漠然とイプスウィッチ湾の方面と考えたのだと思われる。

ケニーの言葉を疑うのは、記憶ちがいをあげつらうためではない。住民の数と土地の広さに関する数字が非現実的であるからである。マサチューセッツ州のアン岬の一部に、1800万人 (eighteen million people) が住むことのできる住宅地を建設することが、どれほど非現実的であるかは、数字を見れば分かる。東京都とニューヨークを合わせた人口がすっぽり収まる都市は、世界最大の都市である。それが33平方マイルの土地に入るはずはない。

日本語で「業者は」としたところから、原文を2行ご覧いただきたい。

They're gonna bring in eighteen million people and they've got thirty-three square miles.
They're the biggest in the area of all (155).

一つ目の文中の“*They*”は、「不動産業者」でよいが、二つ目の文では「不動産業者」ではなく、「世界最大の都市の人口」を指すと取らなければならないだろう。文構造の乱れが目につくと述べたのは、こういうところである。(二つ目の文の“*They*”も「不動産業者」と取れなくはない。しかし、そのつもりで語っているなら「近隣で最大」ではなく、世界最大と言わなくてはならないだろう。) ケニーの嘆きと恐れに対して、オルソンはこう答える。

2. 過去に対する興味の消失

オルソン だがね、ハープ、そうした記事は見かけほど重要ではないと思うんだ。つまり、汚染と文化は別々のものさ! (笑う。) 私が恐れるのは過去に対する興味が――(中略) 2000年までには歴史的遺産という観念が人類の頭から完全に一掃されてしまうことだ。

ケニー 歴史遺産だって。

オルソン 歴史遺産さ。そうすると経験というものが全くなくなる。(中略) グレゴ

リー・コース (Gregory Corso) が数年前に私に言った。どうしてあんたは消えていく都市 (a city) のことを書くんだいね。(中略) 私がその都市を蘇生できる花で、永遠の聖体顕示台になると思っているからだ。[グロスターは] 都市化されない限り、地上の都市 (a city) でなく、特別の「都市」(a City) でありつづける。もし、連邦都市再開発計画の実施が数日間遅れたなら、グロスターは今日でも都市化されていないだろうに！(中略) グロスターは、再開発によってヤフーのようになってしまった。魚の町で、そこが素晴らしいのに。

ケニー だが、町の人はグロスターの何を救おうとしているのだろう。

オルソン 私が言おうとしているのは、そういうことではない。大変重要なことだが、そういう言い方では……

ケニー 私はきみが大騒ぎしたことを言っているんだ……なんという家だったかな……

オルソン パーソンズ家さ、パーソンズ家の館だよ。あれは、愛ゆえの行為だった。愛は負けることがない。君の論拠が愛であつたら、市議会に負けるはずはないんだ。だが、何としたこと、全員一致の意見で私は敗れたのだ (155-56)。

オルソンは、土地開発業者がグロスターを破壊するというケニーの憂慮を、別の次元で捕らえている。土地開発によって住居や景観を新しくすることが良いという考えだけで進んでいくと、人間は過去に対する興味を失ってしまう。過去に対する興味が消え、歴史的遺産を尊ぶ感覚がなくなれば、土地開発によって現状を改変し利益を得ることが善であると考えるのも無理はない。

過去を尊ばず、変革を推し進めることを是とする政策や思想は、理論上はいくらでも考えられるが、ここでは『マクシマス詩篇』を貫く思考法に沿って、資本主義経済体制をその代表と考えることにする。先走るようだが、『ミュソロゴス』の最後を飾るこの対談には、『ミュソロゴス』と『マクシマス詩篇』の最も肝心な点をもう一度確認して置くという性格があるように思えるからだ。

この対談の中でオルソンが語っている「都市」(a City) は、グロスターを始源のアメリカが息づく「花の都市」として捉えようとする語り手マクシマスの頭の中にあるものだ(平野1990: 49-58, 1991: 11-28)。それは地上にある現実の都市 (a city) を超える、アメリカの始まりの理念なのだ。宗教的情熱によって、政教一致の国造りを夢見たピューリタンにとってのアメリカと、ドーチェスター・カンパニーの考えに賛同して新大陸に漁業プランテーションを構築するべく大西洋を渡ってきたグロスターの漁師たちとは、根本的に違っている。宗教的情熱によって新たな国を建設しようとしたピューリタンは、プリマスへ入植した。漁業を始めようとした漁師たちの入植したのが、グロスターなのである。

『マクシマス詩篇』は、宗教的情熱ではなく、漁業が初めてであったとしてアメリカ建国史の読み直しを図る詩篇なのである。漁業プランテーションを造ると言っても、第一次産業である。自分の身体を使って自然の富を必要な分だけ入手するのが基本である。利潤を追求し、商業主義をへて資本主義に傾斜していくプリマスのピューリタンと、グロスターの漁師たちとは決定的に違っている。

グロスターの漁師たちとプリマスのピューリタンが、漁業足場をめぐって争うことになるのも当然と言えるかもしれない (Maximus 103-05; 「手紙23」参照)。資本主義へ傾斜し

ていくピューリタンは、ニューイングランド・マナーを操るようになる。

初期の産業と売買から離れ、
様々な腐敗と結託して利潤を追求するニューイングランド・マナー。
アメリカが大国にのし上がったのは、(中略) 腐敗のおかげ。

もちろん、この間に、腐敗は
土地と労働を呑み込む。そして、今や
世界をも。

(Maximus 76 : 「手紙16」)

1620年代に新大陸へ入植した、場所もそれほど遠くない植民地の生活は全く異なっていた。グロスターの漁師は、自然との共生を旨とし、プリマスのピューリタンは、自然と人間からの搾取による利潤追求を生活原理としたのである。過去に対する興味が消失すれば、グロスターが始源の「都市」であったことは確かめようがなくなるし、これと対照的なプリマスのピューリタンと資本主義の繋がりも見えなくなる。そして腐敗と結託した資本主義が「世界を」呑み込む。

オルソンが対談で口にするパーソンズ家に目を転じよう。グロスターのウェスタン・アヴェニュー106番地にあった由緒ある建物パーソンズ＝モース館 (the Parsons-Morse house) の取り壊しが決定したのも、「歴史的建造物」を残すよりも大切なことがあると市議会が考えたためである。パーソンズ＝モース館は、グロスターの名家で、初代パーソンズ (Parsons) 家の末裔達が所有していたこともある歴史的建造物である。この保存をオルソンは市議会に何度となく訴えていたが、市議会は古い建物を残す意義より、そこを通る住民の安全をとったのである (Butterick による注 : *Muthologos* 200 参照)。

オルソンの主張と、市議会の裁定について、いまだ少し詳しく見ておこう。
1967年8月の『グロスター・デイリー・タイムズ』(the *Gloucester Daily Times*) 紙上でオルソンが主張したことは、以下の通りである。

[パーソンズ＝] モース館が(1)廃墟 (wreck) であり、(2)道がカーブしている所にあるので、取り除くべきだというのが、この館はグロスターの蝶番 (hinge) なのだから、取り去るべきではない。一度取り除けば、二度と回復できない。(中略) 醜い破壊者の鉄球が振り下ろされる前に市会議員に手紙を書くなり電話をするなり、訪ねるなどして、最後のチャンスを生かして欲しい。(館を) 救い、手に入れ、保護するように。我々の知らない人々が将来、安易な現代的考えや、土地を支配する人々のために、自分たちの失ったものが何かを知らずにいることがないように (Peter Anastas 106)。

上記のオルソンの主張の一つ目は、住む者もなく廃墟同然になっているパーソンズ＝モース館を取り壊して欲しいという近隣住民からの要求に対する反対弁論の形でなされている。住民によれば、館は鼠の住処となっており、健康上も安全の点からも取り壊しが必要である。館はグロスターへの初期入植者サミュエル・パーソンズ (Samuel Parsons) が

1713年に建てたものである (Anastas 106)。

二つ目は、ウェスタン・アヴェニューが危険なカーブを描く所に館が位置していることと関係する。州立公共事業局 (the state Department of Public Works) は、道を真直ぐにするとかねてより約束していた (Anastas 106)。道路を往来する自動車の安全確保のために、パーソンズ＝モース館の取り壊しが必要になったのである。

近隣住民と州立公共事業局の要請を受理した市議会が、「館と道路を保存したい」 (Anastas 106) というオルソンの意見を受け入れなかったことは、見た通りである。「館はグロスターで最古のものであり、道路のカーブもアン岬で最古のカーブだからから保存する価値があると主張し、買い取る用意がある」 (Anastas 106) とまで言うオルソンと、古さを不便さ、不衛生、危険と同一視し、撤去することを良しとする市議会の考え方とは、正面から衝突した。そして、オルソンが負けた。ただし、オルソンが市議会と闘って負けるのは、この時だけではない。

グロスターの中心的建物が壊されるもう一つの例を見ておこう。『マクシマス詩篇』中の「12月18日」 (“December 18th”) で描かれるのは、ウェスト・エンドにあった「赤い花」マンスフィールド館 (the Mansfield house) の取り壊しである。

そしてバラの赤が消えた
マンスフィールド館の
二階——と——三階は、通りの
暗い
花だった——ああ、グロスターには

もうウェスト・エンドが
ない。グロスターは今や
叩き潰されて、めちゃくちゃになった
この国の一部に
すぎない。あらゆる部分が膨れ上がり
壊滅
して
頽廃状態
(中略)

グロスターも
気が狂ってしまい
今やアメリカ合衆国と
区別がつかない。

(Maximus 597-99)

バタリックの『マクシマス詩篇案内』によると、これは、1968年の12月に書かれた詩である。冒頭行の「バラの赤」とは、アルフレッド・マンスフィールド・ブルックス (Alfred Mansfield Brooks) の生家を指す。この界限はウェスト・エンドと呼ばれていた。マンス

フィールド館は、1830年に火事にあった後、ブルックスの母親の結婚に際して再建された (Butterick, *Guide* 728-29)。グロスターのミドル・ストリートのほぼ西の端に当たる所から、マンスフィールド館のあった界限は、ウェスト・エンドと呼ばれたようだ。

館は連邦時代様式、あるいはコロニアル様式を遺すレンガ造りの三階建てで、一階にはオールド・タイマーズ酒場 (the Old Timers' Tavern) があった。旧市庁舎の中心部分もそこには含まれていた。シェル石油のガソリンスタンド (the Shell Station) を入れるために、ウェスト・エンドからブルックスの家を撤去しようという案が市議会で決まった。これに対して、オルソンは、「ウェスト・エンドが危機に瀕している」として1968年1月11日付の『グロスター・タイムズ』 (the *Gloucester Times*) 紙上で反対表明をしているのである (Butterick, *Guide* 728-29)。

住民の暮らしの便宜を優先し、歴史的建造物を取り壊す点では、パーソンズ＝モース館の取り壊しと同一の主題である。違っているのは、嘆きの程度とその深さである。住民の暮らしの便宜を優先し、経済的に力のある者を後押しする市議会の政策は、歴史的建造物の破壊を是とするのである。タリーのガソリンスタンド (Tallys Mobil Service Station) を拡張するために、そのようなことをする市議会に対して、オルソンはこう言っている。「どれほど進歩的といっても、たかだか利潤追求者のひとりに、それもすぐに貪欲になって行く者たちの便宜を図るために」マンスフィールド館を取り壊すことを思いとどまって欲しい、と (Butterick, *Guide* 729)。

しかし、この時もオルソンは敗れる。意義ある歴史的建造物を遺そうとするオルソンの努力は実を結ばず、目先の利便を優先する利潤追求型の政策がとられるのである。引用した詩の最終連は、アメリカ本土から自律していたグロスターが今や、アメリカ本土と同じ価値観を持つようになってしまったことへの慨嘆である。

資本主義の根幹である利潤追求型の思考法は、プリマス植民地のピューリタンのものがあり、グロスターの漁師はその思考や態度とは闘う側にあったはずである。17世紀においてはそうだったが、20世紀中葉の現在は事情が異なり、利潤追求型の思考法が、グロスターを蝕むようになってきた。しかも、かつてグロスターは、利潤追求型の町ではなかったことを偲ばせる歴史的建造物を破壊することも辞さなくなってきたのである。これでは、「過去」に立ち返って、現在と未来を考える機会さえなくなる。オルソンが嘆くのは、そこである。では、グロスターの、そしてアメリカの未来はどうなるのか。

市議会が、与えられてきた物 (what they've been given) に対して敬意を払うことに情けないほど失敗したことについて言及した後 (156)、オルソンはアメリカ人をどう考えているかを語る。そこを見ておこう。

3. 死に向かうアメリカ

オルソン アメリカ人は、死に恋する国民だと言われてきた。そのことは地球から飛び立つことが、信じられないことだが、空想科学小説の希望だった。別の生命体はどこかにいる、というわけだ。(中略) 青少年たちは、この馬鹿げた幻想に夢中になっている、どこか他に生命体があるという幻想に。それで、私は気になるんだ、彼らは楽しみがないのではないかと。

ケニー では君は、グロスターの破壊を承諾した (reconciled) のかい。

オルソン 「承諾した」なんて、消極的に表現するつもりはない。始終、一つの建物や、レンガのことで闘ってはいられないというだけさ。(中略) ジョン・バブソン (John Babson) が見たグロスター港の夢では、外港にも埠頭があって、現在のソヴィエトやポーランドや西ドイツや日本のように〔盛んに〕漁業が営まれていた。(中略) バブソンは、グロスター全体を完全に漁業による果実だと見ていたのだ。つまり、巨大な大洋が港を超え、埠頭を超え、漁船を超え、漁業を超えて沖へ沖へと広がっていた (157)。

ケニー グロスターの尻を蹴ってやりたいよ。特にロックポートを。

オルソン いいさ。やってくれ。尻を蹴ってくれ。

ケニー 話にならないよ。自分たちに与えられた物を理解できず、その価値も分からないなんて。

オルソン ロックポートは、自分で威張っているだけのつまらない町なんだ。メイン州を貧相にしたようなものだ。(中略) 私は、ロックポートには軽蔑しか感じない (158-59)。

対談の主題は、グロスターが過去の遺産を重要視しなければ、現在の位置も確実に分かってなくなる。そして、土地や環境を投資の対象として見るようになると、現在と未来の金銭的利益しか考えない人ばかりになる。そうなれば、グロスターは始源の花を蔵する「都市」(polis) などではなく、利潤を追求するアメリカの一部になる他ないのである。

青少年たちが空想科学小説を愛読することにさえ、オルソンは危惧を抱いている。この世界からの「逃避」を望んでいるのではないかと。グロスターの過去を正しく認識しないことには、アメリカが分からない。アメリカは、1620年代から商業主義や初期資本主義の兆候は見えたとはいえ、漁業の地として生きていく方向も持っていたのだ。それを知らなければならない、とオルソンは言う。

対談の中に出てくるジョン・バブソン (1809-86) は、バタリックによれば、歴史家でアン岬歴史協会 (Cape Ann Historical Society) とソーヤー図書館 (Sawyer Free Library) の設立者。バブソンはマサチューセッツ州の銀行業の歴史を自分の生きていた時代まで記述した銀行家でもある。著書に『グロスター史』(*The History of Gloucester*, 1860) がある。オルソンにとって『マクシマス詩篇』執筆の際に主要な典拠になった書物である (Butterick による注: *Muthologos* 200)。したがって、対談ではバブソンの「夢想」と言っているが、それは夢ではなく、グロスターの正確な叙述を指すと思われる。漁業が盛んだったころのグロスターは、バブソンが思うとおり、「漁業による果実」だったのだ。

そうした時代が過去のものになると、世界でも指折りの漁港であった意気盛んなグロスターは、斜陽化を免れない。だからこそ、現在の位置を知るために、過去の歴史的建造物の保存が必要になってくるのだ。それが、市議会の人々には理解できなかった。オルソンの意見は、市議会を動かすほどの支持を集めることができなかったのである。「グロスターの尻を蹴ってやりたいよ」とケニーが言うのも頷ける。グロスター (市民) が滅びへの道を歩もうとするからだ。グロスターを愛せないのは、青少年だけではない。

ロックポート (Rockport) は、グロスターの東に位置する町だが、オルソンは嫌ってい

る。『マクシマス詩篇』「手紙 5」では、ロックポートで行なわれる商売が「いかがわしい」(“queer”)とされている (*Maximus* 21)。オルソンがロックポートを嫌う理由は対談中に語られることで十分だろう。

この箇所で大切なのは、自分の価値を認識することなく、死に向かうグロスターの危機である。男女間の問題に見えた家庭問題の深層には、過去に対する興味の消失がある。アメリカ建国と関わる「都市」グロスターの住民は、誇りを持つべきなのだが、不動産業者の土地開発に町を牛耳られている。商業主義や初期資本主義と互角に闘う気概のあった「都市」グロスターは、歴史に無関心な住民の知的怠慢によって、資本主義のなすがまになる。つまり、使い捨てにされるのだ。家庭問題の深層は以上のような問題の束の上にあると考えられる。

では、グロスターの未来について、オルソンとケニーとの間で、どのような対談がなされたのかを、次に見ておこう。

III. グロスターの未来

グロスターの未来は薄気味の悪い文脈の中で語られる。というのは、ホイッスラー (Whistler) の愛弟子となった若者エルウェル (Elwell) が、焼け落ちたばかりのグロスター市庁舎を描いたという不気味な話の後に続くからである。その絵は市庁舎が焼け落ちた翌日の午前 7 時 30 分に完成し、さらにその翌日の同時刻に買い手がついたそうだ。買い手はジョゼフ・プロクター (Joseph Proctor) だったが、今その絵は、プロクター嬢の恋人ビル・マキニス (Bill MacInnis) が所有している。描かれているのは、建て替えられた夜に焼け落ちた市庁舎である。廃墟とレンガ、美しいレンガと崩れ落ちた建物に張られた消防非常線だ。「一見の価値がある絵だよ」とオルソンは言う (160-61)。市庁舎の建て替えは、もう一度やり直すことに決まったそうだ。

ケニー それで、君はアン岬のグロスターが将来どんな風になると考えているんだい。

オルソン (間) 創造のイメージだね、それに人類の生活のイメージだ、人類という種が生き続ける限りの。

ケニー もう一度言ってくれないか。

オルソン (笑って) 創造のイメージだよ、それに人類の生活のイメージだ、人類という種が生き続ける限りの。なぜかという、異常に進歩的な時代に、これほど退行的であることによって、絶対の「シラクサ」(the absolute “Siracusa”) や、ギリシャで最初の偉大な植民地になれるんだ。その都市は偉大だった—私の言っていることが分かるかい、私がテュロスのマクシマス (Maximus of Tyre) を喩え (the figure of speech) として、語り手 (figure of the speech) として選んだのは、グロスターを地上の人々の最後の動き、偉大な移民の動きだと見なしているからなんだ、そんなことには最早なんの面白味もないかもしれないがね。どうしようもない。もし君が、月や火星や金星へ行くことを語ったり、人工衛星を飛ばして木星を通過させる話をしたりしても、木星は太陽と同じく巨大なガスの塊だから、そのどれも移住ではない。それが宇宙だよ。さて、移住はグロスターで終

わったんだ。人間の移住行為はグロスターで終わった。そして私は、人間の移住行動が、バラのリボン (fillet of the rose) だと考えている、エネルギー形体を表わす炎 (the fire of energy patterns) だと。

ケニー なぜ君は、その動きがグロスターで終わったと言うんだ。

オルソン なぜかと言えば、グロスターがこの大陸を始めたからだ。

ケニー この国を始めただって。

オルソン 大陸だよ。(中略) われわれは、出発点に戻って来た。ステファンソンの『帝国の北西進路』(*The Northwest Course of Empire*, 1920) には、地球上の人間の動きは線状で、斜めの、北西へ向かう線だと書いてある。その意味ではグロスターが最後の岸辺になる。(中略) だから、最後の都市国家 (polis) あるいは都市 (city) はグロスターなのだ。そういう訳で、私は思う。ある意味では、われわれは——人間は地球 (earth) を再発見しようとしているか、あるいは地球を去ろうとしているのだと。どちらにでも解釈できる。それなら、グロスターは花になる、選ばれる場所であるという純粋に仏教的な意味で。そうだろう (161-62)。

この対談には解釈の困難な箇所がある。ケニーの疑問は素朴なのだが、オルソンの答えが、通常対談のレベルを超えているからだ。それを整理するために、解釈の困難な箇所を一つずつ挙げてみる。

- (1) グロスターの将来は、創造のイメージだ、それに人類の生活のイメージだ、人類という種が生き続ける限りの。
- (2) テュロスのマクシマス (Maximus of Tyre) を喩え (the figure of speech) として、語り手 (figure of the speech) として選んだのは、グロスターを地上の人々の最後の動き、偉大な移民の動きだと見なしているからなんだ。
- (3) 人間の移住行為はグロスターで終わった。私は、人間の移住行動が、バラのリボン (fillet of the rose) だと考えている、エネルギー形体を表わす炎 (the fire of energy patterns) だと。
- (4) グロスターが最後の岸辺になる。(中略) だから、最後の都市国家 (polis) あるいは都市 (city) はグロスターなのだ。そういう訳で、私は思う。われわれは——人間は地球 (earth) を再発見しようとしているか、あるいは地球を去ろうとしている。どちらにでも解釈できる。それなら、グロスターは花になる、選ばれる場所であるという純粋に仏教的な意味で。

(1)から(4)は、形式こそ違え、語られている内容は同じである。グロスターの現在と将来をどう見るかという問いに対する解答が4つの形式で語られているのだ。それぞれに検討してみよう。

(1)は四つの解答のうちで最も理念的な解答である。都市グロスターの将来を「創造」(creation) のイメージだと語り、同時に人類という種の「生活」(human life) のイメージだと語っている。ならば、ここに提出されている解答は、「生活」そのものが「創造」であるような、逆に言えば「創造」が「生活」であるような、そういう日々が送れる場所こ

そグロスターであると言っていることになる。アメリカ本土の資本主義的価値から離れて、自立している古代ギリシャの都市国家のような「都市」(polis)を想定すると良いのかもしれない。

その場合「創造」が芸術の創作だけであってはならない。狭義の創作ではなく、生活全般にわたる「創造」を、われわれは考えなければならないだろう。生きることと、創ることが同義となる、極めて次元の高い理想が語られている。

(2)は、『マクシマス詩篇』の構成原理を語るものである。なぜ、グロスターの民に向かって、古代テュロスの哲学者マクシマスが語りかける構成にしたのか、をオルソンは語っている。

対談で自分の作品に言及することに違和感を覚える人もあるかもしれない。オルソンの作品をケニーが読んでいるかどうか分からないのに、自作を語るのは、図々しい行為だと感じる人もいるかもしれない。しかし、そういう礼儀を重んじている場合ではない。資本主義を相手に闘おうとすれば、自分の思考や経験のすべてを動員しなければならない。その中に自分の作品の中で結晶させた思考や体験が入っていても、咎め立てするべきではないだろう。『マクシマス詩篇』は、資本主義の悪をアメリカの建国時点にまで遡って描いた一大叙事詩なのである。

テュロスは、アレクサンダー大王の帝国に対して、その一部になることを最後まで拒否し、自律性を保った都市であった。古代都市テュロスのとった態度と、グロスターが、アメリカの一部になるのに抗った態度とは共通するのだ。だからこそオルソンは『マクシマス詩篇』の構成原理を上述のようにしたのである。(平野1990: 41-42参照)。

ただし、グロスターの場合は最終的にはルート128の開通によって、アメリカの一部になってしまう。また、それを契機として、アメリカ本土の資本主義的思考法、すなわち利潤追及至上主義が流入し、グロスター住民が過去に対する興味をなくしていくのも事実なのだ。それゆえに、オルソンの闘いは勝ち目がなさそうなのだが、その事態をどう転じるかが、オルソンのこうした対談や『マクシマス詩篇』の課題なのである。

(3)は、人間の移住行動がグロスターで終わったことと、移住行動の形は「バラのリボン」であり、それは「エネルギー形体」を表わすのだと述べている。人間の移住行動がグロスターで終わったことについては、次節で検討するので、ここでは「バラのリボン」とされる移住行動の形を検討する。

『マクシマス詩篇』には、花の形になるように描いた詩が3篇ある (*Maximus* 479, 498, 499)。そのうちの最初の詩は手書きで、バラの花を上から見たように書かれている。タイトルは「移住の実際」である。これを、読みやすい形に直したものが『マクシマス詩篇』に掲載してある (*Maximus* 565) ので、それを見ておこう。

移住の実際 (それはおそらく
他のどのこととも変わらぬ歴史の常数。 移住は

動植物や人間が自分に適した
—神々だってそうだ—好ましい

環境を追い求めること。だから、常に新しい中心へ向かう。懇願されたらおれは、アサ神族＝ヴァニル神族の双極子を加えることにしよう、それを

機動力に加えるのだ（そこに加わる怒りが
魂 —すなわち、精神や意志は常に

先立つ物に対抗し、これを侵すことに成功する、これがこの世界の　バラであり、バラであり、バラなのだ

八月八日，月曜日，夜
(*Maximus 565*)

「アサ神族」(the Aesir)は、古代スカンディナヴィアの空の神々。「ヴァニル神族」(the Vanirs)は、古代スカンディナヴィアの神々で、平和と繁栄、土地の豊饒を司る。5行目から7行目は、容易に理解できる詩行ではないが、バラ型の詩と比べるために敢えて全文を引用した。

次にバラを思わせる形で書かれた詩を見てみよう。原文と翻訳の両方を挙げる。

[illegible]

(*Maximus* 479)

その中心へ向かうような動線を描くのだ。その結果を下に示してみる。

移住の実際（たぶん それは 歴史上のどの事とも 違わぬ不変のこと—
移住とは探究 動物や植物や 人間が —神も同じことだ—さらに良いか
望ましい環境を追い求める
[汝の隣人の妻を欲してはならない、土地や物を。]
だから常に新しい中心に向かうのだ
もっと詳しく説明してくれと言われれば
あるは北極アンテナをつけろと言われれば
アサ神族とヴァニル神族が
比類ない画像
意識と精神は 常に侵入し 対抗して勝利するのだ 先行するものに。
別の場所で
これが この世の バラだ

一九六五年十一月二十日土曜日

チャールズ・オルソン

本論53-54頁で紹介した、普通のタイポグラフィで書かれた「移住の実際」と細かな点では異同が見られるが、内容的にはほとんど同じと言ってよい。「移住」は、動植物、人間が行なう行為で、さらに良い環境を求めて移動することだ、というテーゼは同一である。新しい中心へ向かって動くこと、詩はその必要性を述べたものだ。

「汝の隣人の妻を欲してはならない、土地や物を」は、隣人の妻や、召し使いなど隣人のものを一切欲してはならない、というモーセの十戒（「出エジプト記」20章参照）を出典とする。「望ましい環境」であっても隣人のものを欲してはならないという戒めを書き入れた箇所であるが、書き手が真面目なら真面目なほど読者はユーモラスに感じる箇所である。

「北極アンテナ」「アサ神族」「ヴァニル神族」「比類ない画像」についての記述は、このままでは分かり難い。後に「懇願されたらおれは、アサ神族＝ヴァニル神族の双極子を加えることにしよう、それを／機動力に加えるのだ（そこに加わる怒りが／魂^{アニムス}—すなわち、精神や意志は常に」（本論53-54頁参照）と書き改められた理由は、更に推敲を重ね分かりやすくした結果であろう。バラ型版よりも、普通のタイポグラフィで書かれた版の方が、分かりやすくなっている。

最終3行は、「さらに良い環境を求めて、動植物も人間も移住するのだ」という最初のテーゼを強く肯定し、その精神的意義を高らかに讃える調子で書かれている。「意識と精神」は別の場所で、先行するものに「侵入し 対抗して勝利する」、それが「この世のバラ」だ、と。われわれが読んでいる最終3行は、移住の話でありまた、意識と精神の話でもある。これまでであった中心とは別の所に中心を見出すこと、それが何事かをなす場合の鉄則であるという知恵の言葉が語られているようだ。この知恵の言葉のキーワードが「移住」なのである。

タイポグラフィについて一言述べておきたい。意味的には、普通のタイポグラフィの方

が読みやすい。「移住の実際」の場合はバラ型に書かれたのが先で、推敲したのちに普通のタイポグラフィで書かれているので、後者の方が意味的にも分かりやすくなっている。しかし、バラ型のタイポグラフィで書かれた方の詩は、まず、どちらに向かって読むと良いのかを、読者が探さなければならない。その分だけ、読者は詩の意味の成立に深く関わることになる。そして、左から螺旋状に中心へ向かって読み進んだ果てに見出すのが「これがこの世のバラだ」という詩句なのである。決して読みやすくない手書き文字を読んで、たどり着いたところが「この世のバラ」だという構成には、比類ない説得力がある。タイポグラフィがバラ型の詩の結末＝中心に、「これがこの世のバラだ」という詩句があると、読者は、筆致に勢いと方向性のあるこのバラ型の詩そのものが、「この世のバラ」なのではないかと思ひ至るからである。

バラについては、もう一言述べておかなければならない。アメリカの詩人・小説家のガートルード・スタイン (Gertrude Stein, 1874-1946) は、『世界はまるい』(*The World is Round*, 1939) の中で少女ローズ (Rose) に「バラはバラで、バラで、バラで、バラである」(“Rose is a Rose is a Rose is a Rose is a Rose,” 50) というフレーズを木の周りに刻ませた。このフレーズは無論、少女が自分の名前について「ローズはローズで、ローズで、ローズなの」という思いを込めて刻んだものとも考えられる。また、『地理と劇』(*Geography and Plays*, 1922) 中の「聖なるエミリー」(“Sacred Emily”) の中に「バラはバラで、バラで、バラである」(“Rose is a rose is a rose is a rose,” 187) という特徴的なフレーズの最初の例をスタインは記した。バラは他の何物でもなくバラである (少女ローズは他の誰でもなくローズなのである) という宣言なのだとも、バラはバラであるという同語反復の繰り返しであるとも、バラはバラであるという詩句を、円を描くように書くことによって、絵のような詩を作りだしているとも、取れる詩である。言葉が意味を失う瞬間に立ち会っているような気もすれば、大真面目に考えることが馬鹿馬鹿しいようにも感じられる不思議な詩句である。ただし、バラ型版の「移住の実際」で、「これがこの世のバラである」に出会う衝撃には、ノンセンスの要素はまったく介入しない。

(4) ヴィルヒャウルマー・ステファンソン (Vilhjalmur Stefansson) の『帝国の北西 [北] 進路』(*The Northwest [Northward] Course of Empire*, 1920年著) によれば、地球上の人間の動きは斜めに北西へ向かう線である。[イギリスを起点として北西に進んだ場合]、グロスターが最後の岸辺になる。(3)で移住行動の形が「バラのリボン」であるとされていたのは、「移住の実際」で検討したバラ型の詩の形式と内容に関係がある。バラ型の詩で語られたように、移住それ自体が「バラ」であるなら、移住の経路は、「バラの軌跡」＝「バラのリボン」として考えられる。そして、この「バラのリボン」が目指した最後の都市国家 (polis), あるいは都市 (city)こそグロスターだと、オルソンは語るのである。

だとすれば、次のオルソンの台詞はどう解釈できるだろうか。

われわれは——人間は地球 (earth) を再発見しようとしているか、あるいは地球を去ろうとしている。

都市国家グロスターを再発見することは、地球を再発見することと同じくらい重要なことである。それが出来ずにグロスターを (資本主義の汚辱の中に) 見捨てて去ることは、人

類が地球で生きる可能性を捨てることと同じだという意味になる。

この対談を締めくくるオルソンの言葉「それなら、グロスターは花になる、選ばれる場所であるという純粋に仏教的な意味で」は、資本主義の汚辱の中に埋もれて現在は気が狂ったようになっていくグロスターだが、始源の原型都市＝「花」となって、生き返って欲しいというオルソンの願いの表明である。それほど、グロスターは資本主義によって追い詰められているのだ。文明がグロスターで終わり、未来がないならば、人類の文明も終わり、未来はない。

グロスターの未来が、全世界の未来と同じく、終焉の危機に瀕しているという認識に達するのがこの章である。では、どのような方途があるというのか。最終章のテーマは、まさにそれである。

IV. 再生への道

自分たちの人生からなくなってしまったものに、再生の鍵があるようだ。二人の対談を聞いてみよう。

1. 現在のグロスター

オルソン いいかい、ハーブ、われわれは実際、われわれの人生からなくなってしまったものの話をしているんだよ。(中略) 父の時代には、人生はまだ危険だった。毎日、仕事に出かけるたびに、男 (a man) は危険にあった。今日では、唯一致命的なのは自動車で、それも実際は手足を怪我するくらいだ。しかし、自分が自然の全体に立ち向かっているような感覚はないだろう。(中略) 男が抱く種類の欲求があるのだが――男は、何かを失っている。

ケニー それは、今日の製材や鉱業とは違うね。

オルソン そういうものとは違う。私の父親の仕事は煉瓦の煙突を新しい鉄の煙突に取り換える仕事だった。そのために、足場に登らなければならず、危険だった。父は、人が言うように、背の高い鋼 (high steel) だった。今日のインディアンの中で、イロコイ族 (the Iroquois) だけが建物の上に登ることができ、建物の頂上を作ることが出来るのだ。そんな高さに耐えられるのは、イロコイ族だけだからだ。そういう種類の事なんだ。われわれが決定的に持っている何かとはそういうものだ。私は、肉体が魂なのだと思う。だから、創造の要因となる肉体を持っていない者は、魂を持っていないのだ。

ケニー 我々が最良の特色を発揮するには、危険という要素が必要だということかい。

オルソン 危険の性質ではなくて、感受性の、注意力の性質が精神状態になるのだと思う。今日のひどく弛緩した状態、怠慢で、不足しており、しまりのない状態は、もはやどんな注意力も、感受性も必要がなくなったから生じたのだ。自動車や家や経済や貨幣機構などの環境が、何もかも面倒を見てくれる。事実、もはやお金さえなくて、クレジットがある。これは、人類という種が入り込んだ、気の狂った種類の自然以後 (a post-nature) だ、自然以後の状態 (post-natural thing) だ。(中略) 創造が決定的なのだ。だから、創造から離れると、何もかも失ってしま

う。

ケニー その通り。グロスター市 (the city of Gloucester) は、ある意味で何もかも失ってしまった。

オルソン 私は毎日、信じられるものを探すために遠くへ行くのさ。(中略)

ケニー グロスターからかい。

オルソン 毎日、家から遠くへ出かける。文字通り、毎日、数インチでも遠くへ行く。必要だと思うものに触れるためにね。

ケニー それは、どういう物だい。

オルソン 赤い羽根をしたクロムクドリとか、面白い雑草とか、大気とか、変化だね——新しい、大気の動きの。

ケニー 人々はどうかい。

オルソン 人々は——十分面白い (169-171)。

対談の行なわれた1969年当時には、かつてあった感覚、すなわち危険を感じながら仕事をする感覚、「自然の全体に立ち向かっている感覚」、つまり、肉体と精神が結びついた魂の感覚がなくなっていると、オルソンは言う。すでに、「自然以後」の状態が蔓延しており、感受性や注意力を働かせる必要がなくなっている。この状態は、創造から離れた状態である。しかし、創造から離れると何もかも失ってしまうのだ、オルソンはそう語っている。

この状態とは、後期資本主義の経済・社会構造に他ならない。そうした大きな構造の中にあって、始源の都市グロスターを再生させる道はその有無さえ定かではない。確かな物を求めて、オルソンは外出し、何らかの成果を得るというのだ。しかし、その成果の、ほとんど空霊なことが、絶望の深さを示している。

2. 現状の肯定

上で見たIV章1節から窺えるのは、グロスターの命運は今まさに尽きようとしていることだ。それならば、至急、対策を講じなければならない。地球上の最後の「都市」が、滅んで良いはずはないからだ。二人の対談に耳を傾けよう。

ケニー 聞きたいことがあるんだ。私の旧友ビル・カファソ (Bill Cafasso) はグロスターに住んでいて、C and Cを経営している。私はグロスターに関して幾つか質問してみた。私はこう尋ねた、グロスターは経済的には不景気だねと。そうだとビルは言った。その通りだ、経済的には不景気な町だと。しかし、心配はない、その町の人々はどうすれば良いかを心得ていると。ビルによると、町の人々は王様のように暮らしているのだ。

オルソン 王様ね。分かるよ。

ケニー みんな天使だと、ビルは言っている。

オルソン その通りだ。私はグロスターが最も素晴らしく、最も裕福な都市の一つだと思っている。(中略) もし、難しい経済学の研究をやれば、[グロスターが不景気な町だという結論とは] 正反対の結論が出てくるのではないかと思う。(中略)

ケニー やって見ると良いかもしれない。カファソが言うには、雇用補償と……

オルソン 食物加工をする労働者には、2倍、3倍、4倍の仕事がある。朝、道路の向こう側にある家から、労働者たちが急発進で出て行くのを私は見ている。一体何人の人が一日中仕事に出て、給金を家に持ち帰ることだろうか。ワシントンの黒人のことを考えて見ると良い。グロスターで水産業に携わる労働者が稼ぐ額と比べると問題にならない。三人か四人の娘たち——いや、二人か三人の娘たちと母親と伯母。グロスターでは、四人の女たちが夜明けと共に家々から「働きに」出て行くのだ。(中略)

ケニー そのことはよく分かった。今度は私の質問に答えてくれ。噂では、グロスターで魚をさばく女たちの言葉は最高に乱暴だというが。

オルソン その通りだ。身体を真二つに切り裂くような言葉だ。刃物のような言葉で——とても聞いていられない。あれほど不潔で汚く情け容赦のない口を利く女たちに、出会ったことはない(171-72)。

ケニーとオルソンの対談を聞いた者は、耳を疑うに違いない。なぜなら、グロスターの命運は尽きかけているどころか、確かに「不景気」なのだが、市民はどうすれば良いかを知っており、自信を持って「王様」のように暮らしている、とされているからだ。それどころか、[主に女性を指して]、魚の食品加工に携わる労働者には普通の仕事に比べて2倍、3倍、4倍もの仕事がある点を指摘し、「不景気」に見えても、漁業の町グロスターは大丈夫だという結論が導き出されている。「再生の道」と題した章だが、「再生の道」を採す必要がないという対談が展開されているのだ。

この時の対談の論理は、ブラック・マウンテン大学が財政難で閉校寸前になった1953年に学長オルソンが用いた論理と酷似している。「都市」(“a city”)という概念を持ち出すことによって財政難を、受け入れ、かつ乗り越えるのだ。資本主義の利潤追及原理に引きずり回されるのではなく、芸術の花咲く「都市」を作ることをブラック・マウンテン大学の目的として顕揚し、資本主義の論理に対抗したのが、1953年から1956年であった(平野 2014: 113-16 参照)。

対談では、経済問題を人が生き生きと生きているか否かという問題に転換している。その態度は、ブラック・マウンテン大学の財政問題に対処するときのオルソンの考え方と同じである。経済ではなく、精神と肉体の優位をオルソンは常に主張するのである。

しかし、気になることが二つある。上の引用では、女たちが「夜明けと共に」仕事に行く様子が力強く語られるが、男たちが仕事へ行く様子が一切語られない。漁に出るのだから語る必要がないのであろうが、全く語られないのはバランスを欠くように思う。

気になることの二つ目は、ケニーの最後の質問と関連する。女たちは、なぜ聞いた者の「身体を真二つに切り裂く」ような、この上なく「不潔で汚く情け容赦のない口を利く女たち」なのか。また、女たちの言葉を聞くと、「平手打を食わされるどころか、人間としての尊厳が破壊された気がする」(your face was not only slapped but that you were—your dignity as a man was destroyed, 173)のか。

推定の域を出ないが、二つの疑問に対する答えは、問いの中で明かされているのかもしれない。女たちの言葉が厳しいのは、男たちの稼ぎが少なく生活が厳しいからだ。最後

の引用で「破壊される」のは、「人間 (man) としての尊厳」ではなく、「男 (man) としての尊厳」なのだ。

資本主義経済体制に抗う「都市」建設を夢見るのは良いが、そのしわ寄せが女たちに来る場合、女は男の尊厳を認めることはできない。その結果、厳しい言葉を使わざるを得ないのだと、二人の対談者は心の底では理解していたに違いない。そのようにして、女たちが「都市」を支えてくれるのだと。

おわりに

『ミュソロゴス』最終章「チャールズ・オルソンとハーバート・A・ケニーの対談」で明らかになった事は、アメリカの始源が息づく「都市」(“polis”)グロスターと資本主義体制下にある現在の都市 (a city) グロスターとの間の距離である。移住行動の最後の地であり始源の「都市」であるグロスターは、移住の行なわれた17世紀初頭から現在までの間に、資本主義体制下に組み込まれることになった。理想の「都市」からは大きく隔たり、資本主義に蹂躪された現在のグロスターに、今なお「都市」が息づいていることを、二人の対談者は前提にして語った。しかし、「都市」の理想を語った二人は、「都市」の下部構造を支える女たちの苦しみに終わりが無いことを、自分のこととして理解したのである。「都市」グロスターとその問題は、読者にも確実に伝わったはずである。オルソンとケニーの対談の意義はそこにあったと言える。

本研究は、平成25年度-28年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(c)課題番号25370316の支援を受けた。

引用文献

- Anastas, Peter ed. *Charles Olson: Maximus to Gloucester. The Letters and Poems of Charles Olson to the Editor of the Gloucester Daily Times 1962-1969*. Gloucester: Ten Pound Island Book Company, 1992. Print.
- Butterick, George F. *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*. Berkeley: University of California Press, 1978. Print.
- Olson, Charles. “‘I Know Men for Whom Everything Matters’: Charles Olson in Conversation with Herbert A. Kenny.” *Muthologos: The Collected Lectures and Interviews*. Vol. II. Ed. George F. Butterick. Bolinas, California: Four Seasons Foundation, 1979. 154-175. Print.
- . *The Maximus Poems*. Ed. George F. Butterick. Berkeley: University of California, 1983. Print.
- . *Muthologos: The Collected Lectures and Interview*. Vol. I and II. Ed. George F. Butterick. Bolinas, California: Four Seasons Foundation, Vol. I. 1978, Vol. II 1979. Print.
- Stein, Gertrude. “Sacred Emily” in *Geography and Plays. The Major Works of Gertrude Stein*. Volume 5. Tokyo: Hon-no-tomo-sha, 1993. Print.
- . *The World Is Round. The Major Works of Gertrude Stein*. Volume 13. Tokyo: Hon-no-tomo-sha, 1993. Print.
- オルソン, チャールズ作 平野順雄訳『マクシマス詩篇』南雲堂, 2012年。
- スウィフト, ジョナサン作 平井正穂訳『ガリヴァー旅行記』。岩波文庫, 1980年刊。ヤフーと

フウイヌムについては、305-426頁参照。

平野順雄「『手紙』を運ぶオルソン」(上),『梶山女学園大学研究論集』第21号,第1部(1990)。

39-60頁。『手紙』を運ぶオルソン」(下),『梶山女学園大学研究論集』第22号,第1部(1991)。11-51頁。

——,「ブラック・マウンテン回顧録」『人間関係学研究』第13号(2014年),95-120.